

## □ 声 楽

## 國 土 潤 一

2020年に始まった「コロナ禍」も、2023年には5類に分類され、自粛ムードが弱まった一方で、長く鳴りを潜めていたインフルエンザが季節を問わずに活発化するなど、呼吸器と声帯を使う声楽の世界は、まだまだ受難の時が続く。更には、ロシアのウクライナ侵攻は終息のめども未だ立たない。イスラエルのパレスチナ自治区への攻撃も始まってしまった。20世紀終盤に東欧のピロード革命で見た気がしていた明るい未来への希望は、いつの間にか消え去り、100年前の世界に相通ずる何やら「きな臭い時代」が迫って来るような不安な1年でもあった。そんな中でも、音楽は人々と共に有り、歌はその根源的な生命力で人々と共にある。2023年に聴いた声楽の演奏会から、心に残ったものを幾つかチョイスしてみた。

東京オペラシティが行なっている「B→C (バッハからコンテンポラリーへ)」にバリトンの大西宇宙が登場した(5月16日・東京オペラシティ・リサイタルホール)。近年の日本の声楽シーンで八面六臂の活躍を展開している大西が組んだプログラムは、前半がテレマン、J.S.バッハ、ヘンデルというバロックの王道の作曲家と、後半はアメリカのセローン(1984～)、日本の信長貴富(1971～)、ペルーのベリッド(1978～)、日本で現代邦楽の作曲と尺八演奏で旺盛な活動を行なっているアメリカ人のマーティン・リーガンの委嘱作という21世紀作品というもの。21世紀の作品といっても、保守的な作風なのは声楽曲だからだろう。日本の声楽界の「新しい波」を象徴するようなコンサートであった。

5月30日に声楽の共演ピアニストとして活躍する朴令鈴が、自身主催する演奏会でバリトンの大沼徹と共にシューベルトの「美しき水車小屋の娘」を演奏した(Hakuju Hall)。かつては日本人声楽家の王道プログラムだったこの曲集だが、何やら久しぶりに聴く。オペラで活躍する大沼だが、リートの繊細な表現はまた別物。是非、今後もリートにも積極的に取り組んで、表現力の幅を広げてより懐の深い歌手になって欲しい。それには、朴のような名作協力の協力が必要だろう。

6月17日には東京文化会館小ホールでカウンターテナーの松村稔之が大ベテラン小林道夫のピアノでリサイタルを開いた。カメラータ・トウキョウから1昨年リリースした「武満徹ソング・アルバム」が素晴らしかったので、大いに期待して足を運ぶ。前半はイタリア古典歌曲とブラームス、後半が山田耕作と團伊玖磨というプログラム。最大の関心事は後半だったのだが、武満のCDでの見事な日本語の処理とは異なり、多くの日本人声楽家が陥っている「変な日本語のディクション」だ。想像するに武満アルバムでは、プロデューサーの井阪紘氏の指導があったのかもしれない。歌心のある歌手だけに、今後の更なる研鑽に期待したい。

6月28日に声楽のコレペティートルとして大きな足跡を残し、近年は本来の作曲家として魅力的な歌曲を生み出している前田佳世子が、「中声低声の魅力」と題して歌曲展を開いた(マリーコンツェルト)。メゾの佐藤寛子、アルトの野間愛、バリトンの与那城敬、バスの奥秋大樹が、前田自身のピアノで、そ

れぞれの歌をそれぞれに魅力的に歌った。晦渋さのない前田の歌曲の健康的で伸びやかな魅力を満喫する。

7月30日の森野美咲ソプラノ・リサイタルは、今年最大の収穫(東京文化会館小ホール)。出光音楽賞を受賞した森野の五島記念文化賞オペラ新人賞研修記念リサイタルで、ブラームス、リスト、シューベルトのリートに、リゲティやガーシュインを並べた大胆なプログラムを、奔放なまでの歌唱で聴き手を圧倒した。

9月27日に東京文化会館小ホールでメゾの藤村実穂子がリサイタルを行なった。東京文化会館の主催する「プラチナ・シリーズ」で、「日本が誇るメゾソプラノ」とのサブタイトル。ヴォルフラム・リーガーのピアノで、モーツァルト、マーラー、ツェムリンスキー、細川俊夫の歌曲というプログラム。満場の聴衆に藤村は堂々たる歌唱を披露した。その立派な歌唱自体が藤村の積み重ねてきたキャリアの反映とも言える。ただ、若き日の藤村が聴かせてくれた或る種の繊細な瑞々しい「揺らぎ」のような情動に、筆者はむしろ心惹かれる。獲得した風格の代わりに失われたものは、ひょっとしたら大きいかもしれない。

10月19日には開館20周年のHakuju Hallで、「カウンターテナーの饗宴」と題したコンサートがあった。村松稔之、藤木大地、米良美一の3世代のカウンターテナーが、作曲家の加藤昌則のピアノとトークで、ソロとアンサンブルを聴かせた。こうして3人を一堂に聴くと、カウンターテナーと言っても様々な声と歌のありようがあるのを改めて興味深く聴いた。村松はむしろソプラノに近い声質。若い村松の緊張と或る種の必死さは好もしい。藤木の歌う武満徹の「死んだ男の残したものは」は、かつて同ホールの「ギター・フェスト」で絶唱とも呼ぶべき名唱を聴いたが、歌い込むうちにある種の餓舌さを付加してしてしまった。演歌歌手がヒット曲を歌ううちに或る種の「臭み」を帯びてしまう現象に酷似している。久しぶりに聴く米良は、もうカウンターテナーとしての声帯のコントロールを失ってしまったかのようだ。改めて声楽のフィジカルな面と音楽性のコントロールの難しさを見たような思いがした。

10月30日にはリート・デュオの長島剛子と梅本実の「ロマン派から20世紀へ」シリーズの「ツェムリンスキーとヴェーベルンの作品」と題した演奏会を聴く。このコンビの執念さえ感じさせる長年の積み重ねの中から、この2人の監修した「新ウィーン楽派によるドイツ歌曲集」の楽譜も音楽之友社から出版された。彼らの積み重ねた歳月の努力に拍手。

11月24日にはバリトンの石崎秀和がブラームス、マーラーとドイツ民謡のプログラムでのリサイタルを開いた(古賀政男音楽博物館けやきホール)。後半のドイツ民謡は、聴きもどだった。往年のウィーンの名バリトン、エーリッヒ・クンツの録音でこれらの曲を聴いたオールド・ファンもいるだろう。「歌う」という行為の根源的な喜びを再認識させてくれる温か味に溢れた歌唱を堪能した。

年の瀬の12月26日には公益財団法人日本演奏連盟主催の「新進演奏家育成プロジェクト リサイタル・シリーズ」としての村山舞ソプラノ・リサイタルを聴く。前半がアーンとドビュッシーのフランス歌曲、後半がイギリスのクイルター、アメリカのバーバーの英語歌曲という意欲的なもの。演奏者が如何に作品を愛しているか、そして誠実に作品に向き合っているかが強く感じられる演奏は快い。現在の声楽界の進歩と広がりを実感させてくれる聴き納めとなった。